

心の目

連載エッセイ ②47 札幌かに本家社長 日置 達郎

『愛知用水の歴史 ⑤』

大規模な土木事業の陰には必ず犠牲が
つきものです。愛知用水とて例外ではあ
りません。掘削工事を進める中で、有毒
ガスの発生や土石の崩落、炎天下での熱
中症等により、全体で五十六人の方が
亡くなっています。計画の中心人物であ
る「久野庄太郎」氏は遺族への謝罪はも
ちろん、毎日朝夕二度の供養を欠かさず
続けたと言います。ついには自ら「人柱」
になる覚悟までしていましたが、旧知で
ある「勝沼清蔵」氏（名古屋大学総長）
に諭されて断念したそうです。

「人柱」への志願は、工事の無事完工を
願い自らを犠牲とするという壮絶なア
ピールです。当時「人柱」や「人身御供」
といった風習は、既に世の中から死語と

曾川から知多半島の美浜までの一・二km
に及ぶ愛知用水は、沢山の人々の夢を担っ
た「命の水」として供給されるようになって
たのです。

ちなみに愛知県内には、明治以降他に
いくつかの用水路が建設されています。
「明治用水」や「豊川用水」「濃尾用水」
「木曾川用水」などいくつか挙げられます
が、いずれもその地域の人々の生活を根
幹から支える大事な生命線となっていま
す。そしてその一つ一つに、携わった方々
の語り尽くせぬ献身的努力と数々のドラ
マが存在していたことを、私たちは常に
感謝すべきだと思います。

●「弥厚公園」の写真
(安城市和泉町)



上：都築弥厚の銅像
下：案内看板

して消え失せていたと思われませんが、そ
れでもなお神仏や犠牲者、遺族に詫び、
自己の戒めに賭けざるをえなかった久野
氏を、時代錯誤の浅はかな人間だと一体
誰が笑えるでしょうか。逆にそういう崇
高な人物だったからこそ、プロジェクト
完遂に向けて人心をしっかりとめ上げ
ることが出来たのだらうと考えます。

どんな偉大な事業も、たった一人の熱
烈な想いからスタートするとよく言わ
れますが、まさにその典型を見る思いで
す。久野氏の願いからスタートしたほん
の小さな細波は、やがて濱島氏の協力が
加わり大きなうねりとなり、工事中四
年後の昭和三十六年九月に結実を見ます。
しかも、約束の期限を一年以上前倒しし
ての完成です。これ以降、八百津町の木

例えば「明治用水」などはその最たる
ものです。愛知県のほぼ中心に位置する
「安城市」、今は「日本のデンマーク」と
称され豊かな農業地帯が広がっています。
ところが、ここはかつて農作には不向き
な水利性に乏しい酸性粘土質の痩せ土壤
であり、小河川沿いに小規模な水田を営
む小集落が点在するような貧農に近い瘦
せた土地柄でした。農民たちは常に水不
足に悩み、僅かな水を奪い合って絶えず
争いを起こしていたようです。この状況
を見かねてなんとかしようと思ち上がった
のが、地元の名士である「都築弥厚（つ
ぎやこう）翁」（一七六五年〜一八三三
年・江戸時代後期）でした。

(次号に続く)

著者プロフィール



昭和10年、三重県津市美杉町出身
札幌かに本家チェーン代表取締役
店舗設計や庭造りが趣味。
日本飲食産業協会副会長
名古屋まつり・英傑行列
第十代徳川家康役

平成28年8月1日発行
月刊「行」8月号
掲載